

NO KE

野芥遺跡7

—野芥遺跡第18次調査報告—

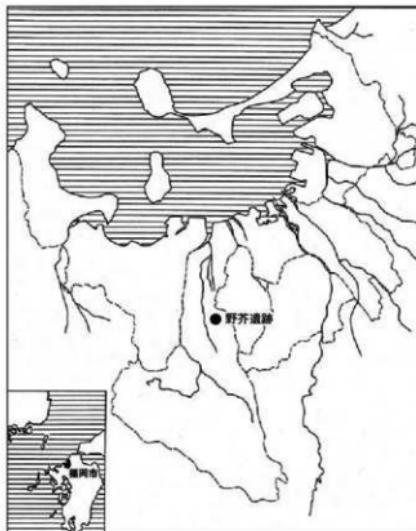
2022

福岡市教育委員会

NO KE

野芥遺跡 7

—野芥遺跡第18次調査報告—



遺跡略号 NKE-18
調査番号 1964

2022
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古の昔から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財が残っています。しかしこれらの埋蔵文化財は開発の進展に伴って、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、努めて参りました。

本書は集合住宅建設に伴い、早良区野芥4丁目地内で実施した野芥遺跡第18次調査の成果を収めるものです。

今回の調査では、古墳時代後期の竪穴建物、土坑、中世の溝・掘立柱建物、柱穴などを検出しました。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、株式会社博多不動産様をはじめとする関係者の方々にはご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 星子明夫

例 言

1. 本書は集合住宅建設に伴い、福岡市早良区野芥4丁目地内において実施した野芥遺跡第18次調査の報告である。
2. 検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
ピット SP 掘立柱建物 SB 竪穴建物 SC 溝 SD 土坑 SK
3. 遺構の実測は木下博文が行った。
4. 遺物の実測は山崎龍雄・山崎賀代子が行った。
5. 遺構・遺物の写真撮影は木下博文が行った。
6. 製図は山崎龍雄・山崎賀代子が行った。
7. 本書で使用した方位は磁北で、真北より $6^{\circ}20'$ 西偏する。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
9. 本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号 1964	遺跡略号 NKE-18	分布地図番号 084 重留
所在地 早良区野芥4丁目372-1		調査面積 180m ²
調査期間 20200302~20200410		

本文目次

第1章 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
第2章 遺跡の立地と環境	1
第3章 調査の記録	5
1 調査の概要	5
2 遺構と遺物	5
溝	5
土坑	5
竪穴建物	5
掘立柱建物	7
S P出土遺物	9
3 まとめ	11
図版1～4	12～15

挿図目次

図1 遺跡の位置 (S = 1 / 25000)	2
図2 調査地点位置図 (S = 1 / 2000)	3
図3 調査区位置図 (S = 1 / 300)	3
図4 調査区平面図 (S = 1 / 100)	4
図5 S D O 1 および出土遺物実測図 (S = 1 / 60、1 / 3、1 / 2)	6
図6 S K O 3 実測図 (S = 1 / 40)	7
図7 S C O 2 実測図 (S = 1 / 80、1 / 20)	8
図8 S C O 2 出土遺物実測図 (S = 1 / 3、1 / 2)	9
図9 S B 10 および出土遺物実測図 (S = 1 / 60、1 / 2)	10
図10 S P出土遺物実測図 (S = 1 / 3)	11

図版目次

図版1 調査区全景（西から） S D O 1（北から）	12
図版2 S D O 1 土層ベルト①（南から） S D O 1 土層ベルト②（南から） 調査区北壁 S D O 1・S K O 3 土層断面（南から） S C O 2 上面（北東から）	13
図版3 石組（北から） 石組（西から） S C O 2 下面（北東から） S B 10（北から）	14
図版4 出土遺物	15

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、令和元（2019）年10月30日付で、株式会社博多不動産より早良区野芥4丁目372-1地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた（事前審査番号2019-2-816）。同地内は野芥遺跡の範囲内であることから、同年12月10日に確認調査を実施し、地表面下28～50cmで遺構を確認した。

今回は集合住宅建設であり、その基礎工事内容は残存遺構への影響を及ぼすものであることから、発掘調査を実施することになった。

本調査は、令和2（2020）年3月2日にパックホウによる表土剥ぎより着手した。3月3日より人力による掘り下げを開始、順次遺構の検出・精査・実測を進め、令和2（2020）年4月10日に終了した。

なお調査範囲は建築工事予定範囲であり、それ以外については埋蔵文化財が現状保存されている。

2 調査体制

調査委託 株式会社博多不動産

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査 令和元・2年度 資料整理 令和3年度）

調査総括 経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課長 普波 正人（令和元～3年度）

同課調査第1係長 吉武 学（令和元・2年度）

本田 浩二郎（令和3年度）

庶務 文化財保護課管理調整係 松原 加奈枝（令和元・2年度）

井手 瑞江（令和3年度）

内藤 愛（令和3年度）

事前審査 埋蔵文化財課事前審査係長 本田 浩二郎（令和元・2年度）

田上 勇一郎（令和3年度）

同課事前審査係主任文化財主事 田上 勇一郎（令和元・2年度）

森本 幹彦（令和3年度）

同課事前審査係 山本 覧平（令和元年度）

三浦 悠葵（令和2・3年度）

調査担当 埋蔵文化財課調査第1係 木下 博文

第2章 遺跡の立地と環境

福岡市早良区の南東部、博多湾岸の平野部を福岡および早良の東西に分かつ位置に油山（標高597m）がそびえる。その北麓、現在福岡大学が立地する西側一帯には、油山から派生する丘陵地があり、各時代の遺跡が集中的に存在する。宅地開発のほか外環状道路敷設に伴う調査により、その内容が明らかとなってきた。

特に古墳時代の遺構は特筆すべきものがある。梅林遺跡では朝鮮半島由来のオンドル（地下式暖房）施設を伴う竪穴建物群、クエゾノ古墳では鍛冶道具を伴う埋葬が確認されている。さらに山側に入った斜面地には後期古墳が集中分布している。

さらに古い遺構としては、飯倉の丘陵地に立地する飯倉遺跡で弥生時代の銅剣、小型鋤製鏡、壺棺墓が確認されている。

丘陵部から西の平野部に目を移すと、古墳時代の水利施設が確認された免遺跡、古墳～中世の集落である次郎丸高石遺跡、中世の拠点集落である田村遺跡、縄文晩期～弥生早期の四箇遺跡などが展開する。

野芥遺跡は、それら遺跡群の一角にあたり、油山派生丘陵に立地する遺跡としては最も西寄りに位置する。旧石器時代～近世の複合遺跡である。2021年10月現在、22次に及ぶ発掘調査を実施している。今回の調査地点は遺跡の南西端部、丘陵の西斜面に位置し、敷地内を遺跡の範囲線が通る。

北東隣地の4次調査（現 市営野芥住宅）では、かまどを持つ古墳時代後期の堅穴住居跡のほか、古代の官衙的機能を備えた建物群が確認されている。龍泉窯系鍋蓮弁文青磁碗や青磁合子、糸切り底の土器皿など中世期の遺物も顕著である。4次調査の道路を挟んだ南側の7次調査では、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代の石器が出土しており、調査の際にはこうした時期の遺構にも注意を払う必要がある。

4次 常松幹雄編『野芥遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第575集 1998

7次 米倉秀紀編『野芥遺跡3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第576集 1998



図1 遺跡の位置 ドットは調査地点

- | | | | |
|------------------|------------------|-----------|----------|
| 1 野芥遺跡 | 2 クエゾノ遺跡・クエゾノ古墳群 | 3 梅林古墳 | 4 野芥大藪遺跡 |
| 5 飯倉G遺跡 | 6 免遺跡 | 7 次郎丸高石遺跡 | 8 田村遺跡 |
| 9 四箇遺跡 | | | |
| 10~17 駄ヶ原古墳群A～H群 | 18 大谷古墳群 | 19 影塚古墳群 | |
| 20~22 霧ヶ谷古墳群A～C群 | 23~29 西油山古墳群B～H群 | | |
| 30~32 山崎古墳群A～C群 | | | |

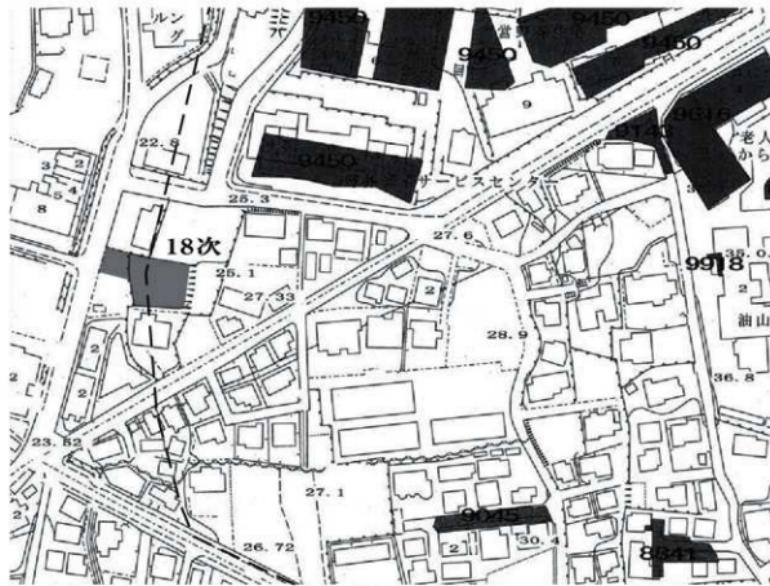


図2 調査地点位置図
 9450 4次 9143 3次 9616 7次
 9918 9次 9045 2次 8841 1次

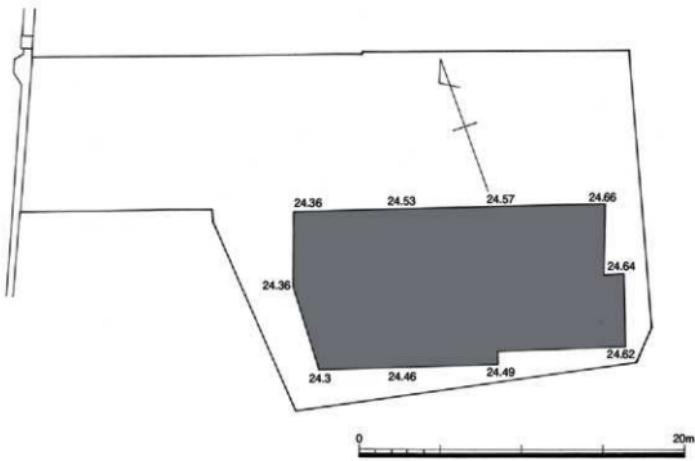
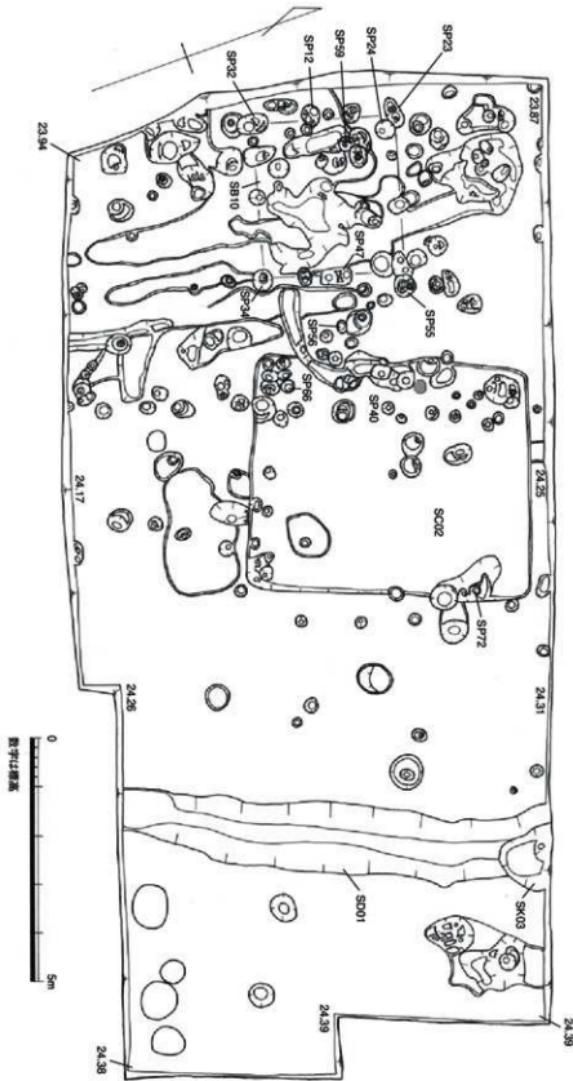


図3 調査区位置図 (S = 1/300)

図4 調査区平面図 ($S = 1 / 100$)



第3章 調査の記録

1 調査の概要

本調査地点は、遺跡の南西端に位置し、標高24m余りの場所に位置する。遺構は地山の黄褐色砂質土層上面で検出した。現地表面からの深さは、山側の東端が25cmで標高24.4m、谷側の西端が50cmで標高23.9mである。地形は東から西へ緩やかに傾斜した後、調査対象範囲の西側で急激に落ちるものとみられる。堆積土はパラス、耕作土、床土、褐色土である。地山の黄褐色砂質土には白色の小砾が多数含まれており、下層になるにつれて黄色味と粘質が増す。検出遺構は古墳時代後期の竪穴建物、古代とみられる土坑、中世とみられる南北方向の溝・掘立柱建物、ピットである。出土遺物は土師器・須恵器・瓦・磁器などで、コンテナ2箱分である。

遺構はピットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

2 遺構と遺物

溝

S D O 1 (図5、図版1)

調査区東側で検出した。検出長8.7m、幅0.9~1.5m、深さ7~43cmの略南北方向で、調査区外に延びる。調査区南壁部が最も浅く、北に向かって深くなり、北壁部はSKO3を切る。出土遺物は須恵器杯身、凸面縄目タタキの瓦片などが散見され当初古代としたが、青磁片や糸切りの土師器皿が含まれていることから、中世と判断した。

出土遺物 (図5、図版4)

1は土師器杯である。浅黄橙色を呈し、底部外面は回転糸切りである。2は土師器小皿である。浅黄橙色を呈し、底部外面は回転糸切りで、板状压痕が残る。3は土師質の鍋である。口縁部内外に指押さえ痕、体部内外面にはハケ目を施し、外面に煤が付着している。4は瓦質の擂鉢である。5は丸瓦である。凸面に縄目タタキ痕がある。6は土師器把手である。にぶい橙色を呈し、中央に長さ3.2cm、幅4~5mmの切れ目がある。7は須恵器杯身で、口径10.0cm、器高4.2cm。底部は回転ヘラ削りを施し、×印のヘラ記号がある。8は鉄釘で、長さ5.9cm、最大幅1.2cm。

土坑

SKO3 (図6、図版2)

調査区東側、北壁際で検出した。当初SDO1として掘り下げていたが、SDO1に切られる別の遺構とみられる。深さ0.7m。

竪穴建物

SCO2 (図7、図版2・3)

調査区中央で検出した。東西4.7m、南北5.7m、残存深さ0.3mの方形である。建物東壁のラインが地形の変換点に当たり、地山は西に向かって緩やかに傾斜していくことから、建物の西側は深さが2cmしか残っていない。覆土の上層は大粒の炭や焼土が多量に含まれていた。貼床に留意して掘り下げたものの、不明瞭であり、炭・焼土を含まなくなり地山と同様の小砾の含まれる土層面を床面と認定し、一旦掘り下げを止めた。その面では、西壁の中央やや北寄りで径20cmの焼土面が検出され、火を伴う活動がなされたものとみられるが、かまどのような構築物は全く検出されなかった。焼土面

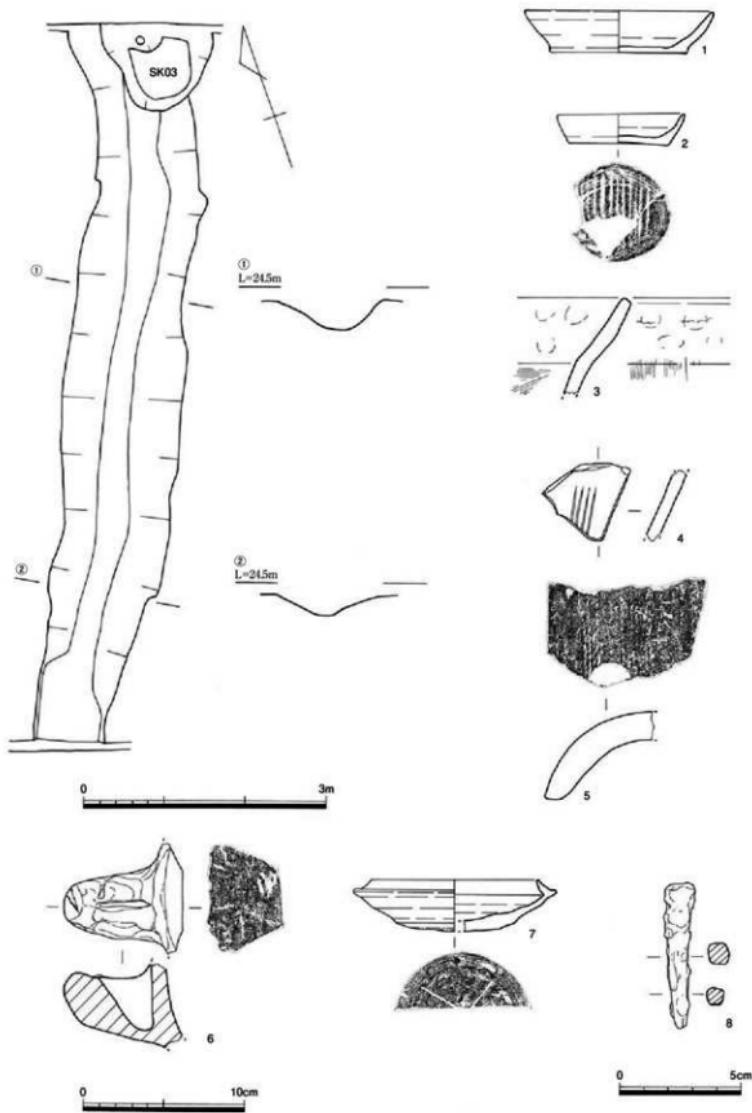


図5 SD01 および出土遺物実測図 ($S = 1/60, 1/3, 1/2$)

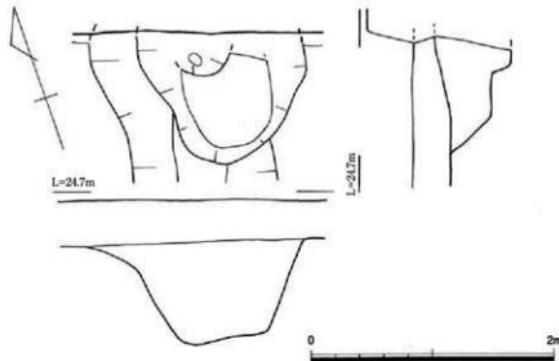


図6 SKO3実測図 ($S = 1/40$)

の1.1m南で石組が設けられ、溝状遺構が建物外部に延びているが、用途不明である。

その後当初止めた床面より約10cm下がったところで検出されたピットから、4本柱とみられる。この最終面では軟質の暗灰褐色土を埋土とする不定形の土坑状プランが見られたため、掘り下げたものの遺物は全く出土せず、遺構ではないものとみられる。

出土遺物は少ないが、朝鮮半島系とみられる完形に復元できる蓋が東壁際北寄りの位置で、床面からやや浮いて出土している。古墳時代後期に位置づけられる。

出土遺物（図8、図版4）

9は伽耶系の陶質土器か。口径11.9cm、つまみを含めた蓋高3.9cm。外面は黒灰色、内面は灰色。断面にはぶい赤褐色を呈す。10は須恵器杯身である。11は土師器杯身である。口径12.6cm、器高3.8cm、底部外面に不定方向の削りを施す。12は土師器杯である。にぶい橙色を呈し、内外面にヘラミガキを施す。13は土師器長胴甕である。復元口径20cm、残存高32.8cm。内面は橙色で、口頸部を板状工具でなで、底部付近に指押さえ痕がある。外面はにぶい褐色で、上3分の2にタタキを施し、底部付近はタタキをなで消している。14は弥生土器の複合口縁壺か。15は弥生土器の丹塗り高杯である。内外面に横向方向のヘラミガキを施す。16は鉄釘か。残存長6.8cm、幅1cm。

掘立柱建物

SB10（図9、図版3）

調査区西側で検出した。東西3.1m、南北3.0mの2間四方である。柱間は1.3~1.8m、柱穴の深さは0.4~0.6mである。

出土遺物（図9、図版4）

17は砥石である。残存長8.2cm、最大幅5.5cm、重さ202g。表裏左右両側面に使用痕が認められる。SP47出土。

石組実測図 ($S = 1/20$)

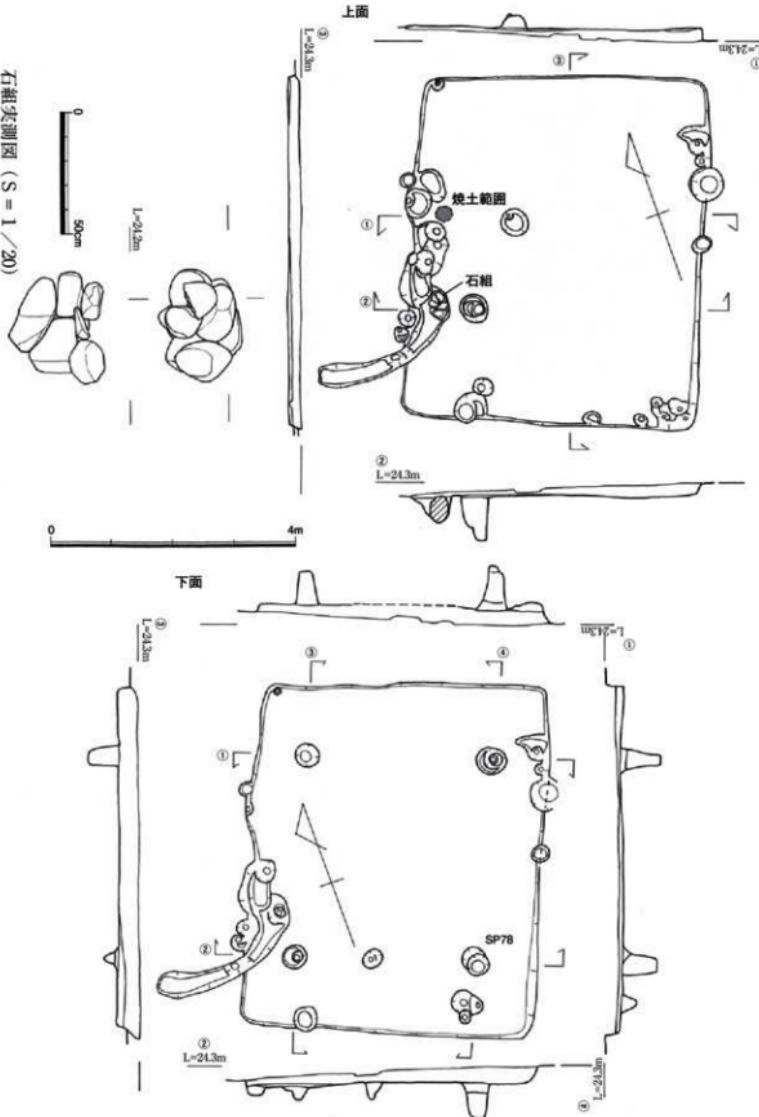


図7 SC 02 実測図 ($S = 1/80, 1/20$)

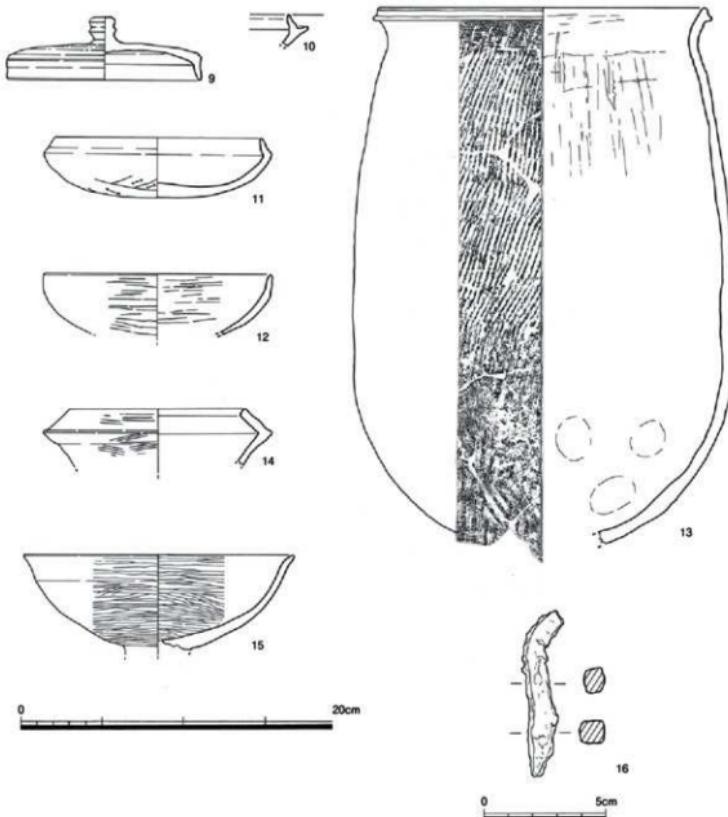


図8 S C 0 2出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2)

S P出土遺物 (図10)

18は土師質鍋である。浅黄橙色を呈し、外面の口縁部付近は斜め方向、より下は縦方向のハケ目を施し、煤が付着している。S P 24出土。19・20は土師器小皿である。19は橙色を呈し、S P 40出土。20は浅黄橙色を呈し、S P 56出土。21は瓦質土器の鉢皿である。S P 55出土。22は土師質鍋である。橙色を呈し、外面はなでて指压さえ痕があり、内面は板状工具による横なでを施す。S P 59出土。23は青磁皿である。復元口径12.2 cm、器高3.7 cm。釉は疊付けを除いて全面にかかる。S P 66出土。24は須恵器甕である。S P 72出土。

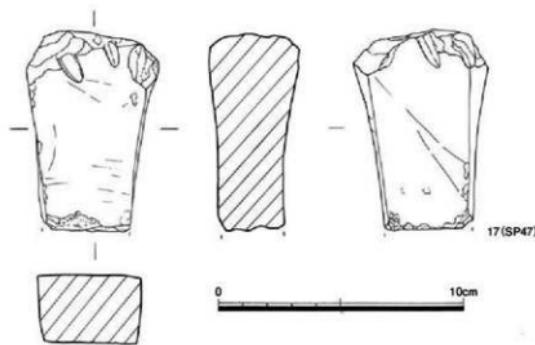
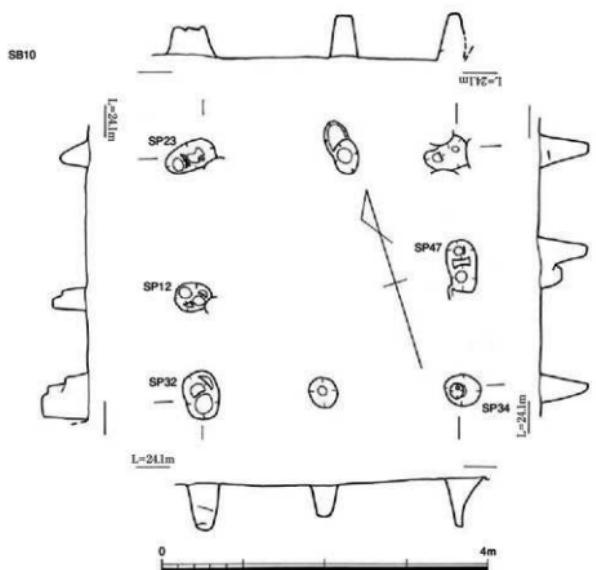


図9 SB10および出土遺物実測図 ($S = 1/60, 1/2$)

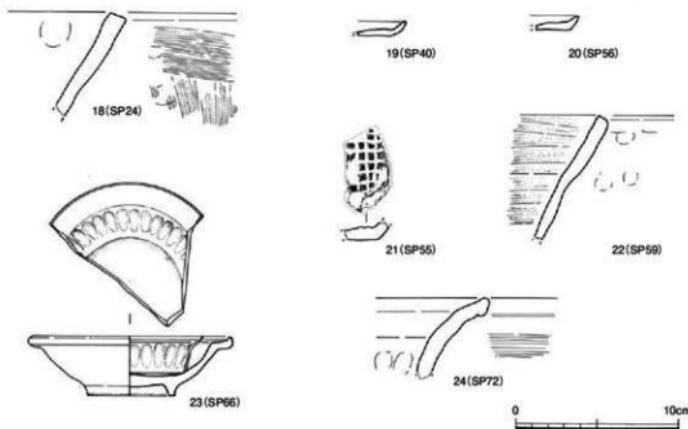


図10 S P出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

3まとめ

最後に今回の調査成果について、簡略ながらまとめておきたい。出土遺物量はコンテナ2箱分と極めて少なかったものの、遺構としては各時代にわたるものを検出できた。

まず最も古く特筆すべきは古墳時代後期に位置づけられる方形堅穴建物SC02である。その出土遺物として注目されるのは朝鮮半島南東端部の伽耶系陶質土器かとみられる青灰色を帯びた蓋である。付属するつまみの形が特異で、同時期の日本列島内製作の須恵器蓋とは異なる。

また周辺の調査で古墳時代後期の堅穴建物が検出された場合、多くはかまどを伴っているが、今回検出のSC02は壁際にかまどの痕跡は認められなかった。火を伴う痕跡としては、本来なら存在したはずの西壁際に当たる位置に小さな円形の焼痕が1ヶ所確認されたのみである。その1.1m南で石組が認められ、建物に伴う施設と考えたが、用途が推測できなかった。

強く印象付けられたのが、覆土の上層において大粒の炭を多く含んでいたことである。廃絶の契機として火を受けた可能性が考えられる。遺物量も非常に少なく、伽耶系陶質土器かと考えられる蓋のみが完形を留めており、強い印象を残す。いわゆる住居としての生活感が今一つ湧いてこない。この建物の性格の解明については、今後の周辺における調査成果を俟ちたい。

山側では南北溝SD01を検出した。古代の遺物が含まれるが、中世に下る遺物が入っており、中世に位置づけた。SC02の覆土を掘り込む小ビットから青磁片が出土しており、中世の遺構の存在がうかがえる。

今回の調査では、周辺で確認されている旧石器～縄文時代の遺構・遺物は確認できなかったが、少量で混入とみられる弥生時代の遺物より中世に至るまでの遺構・遺物を確認し、貴重な資料を加えることができた。

図版 1

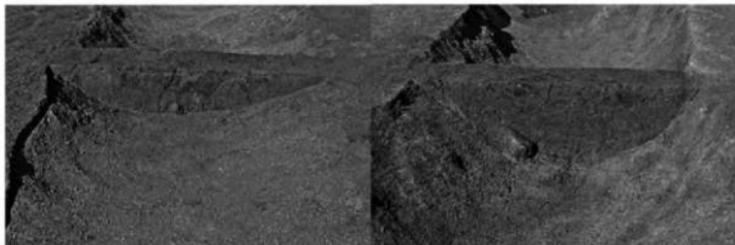


調査区全景（西から）



S D 0 1 (北から)

図版 2



SD 01 土層ベルト① (南から)

SD 01 土層ベルト② (南から)

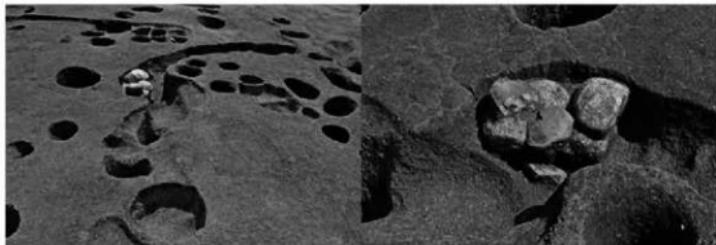


調査区北壁 SD 01・SK 03 土層断面 (南から)



SC 02 上面 (北東から)

図版3

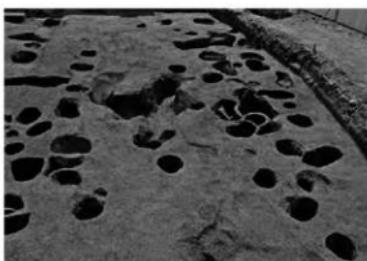


石組 (北から)

石組 (西から)

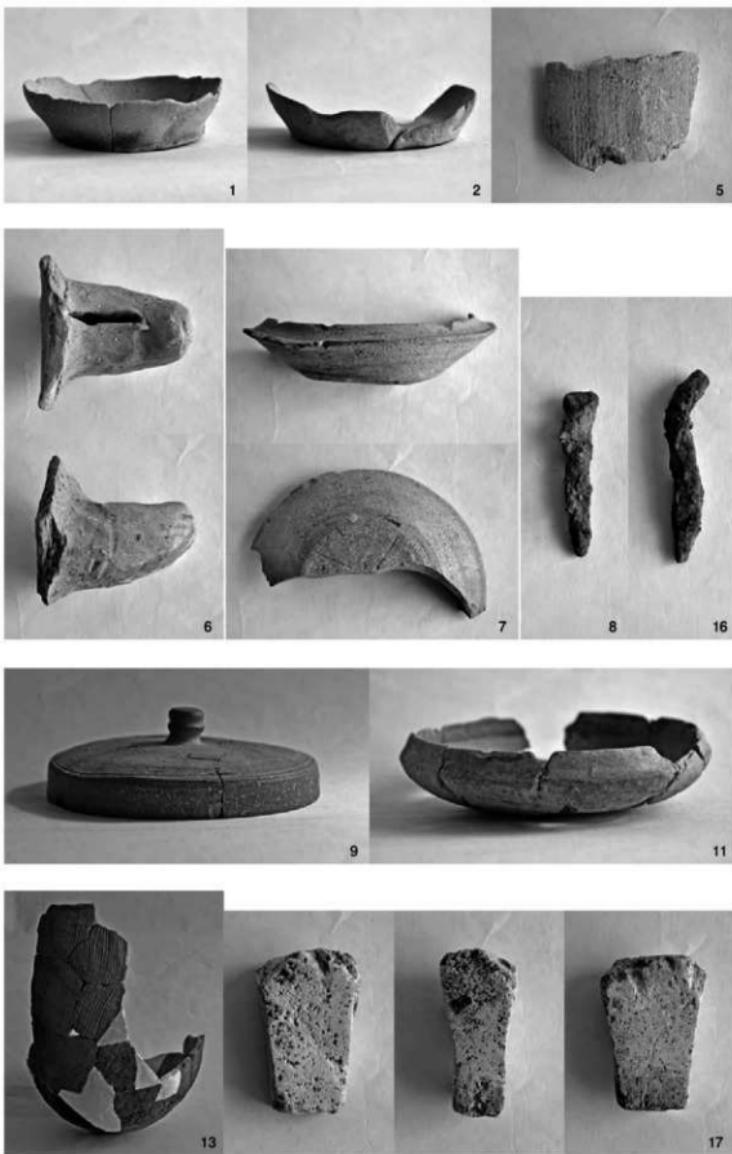


S C 0 2 下面 (北東から)



S B 1 0 (北から)

図版 4



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	のけいせき							
書名	野芥遺跡7							
副書名	野芥遺跡第18次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第1446集							
編著者名	木下博文							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2022年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因	
野芥遺跡 第18次	福岡市早良区 野芥4丁目372-1	40137	0319	33度 32分 18.35秒	130度 20分 ~ 44.72秒	20020302 ~ 20020410	180	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
野芥遺跡	集落跡	弥生～中世	堅穴建物、 土坑、溝、掘立 柱建物、柱穴	弥生土器、須恵器、 土師器、青磁				
要約	野芥遺跡は、福岡市早良区南東部の丘陵上に立地する旧石器時代～近世の複合遺跡である。今回の調査地点は遺跡の南西端部、標高24m余りの場所に位置する。北東隣地の4次調査地点（現 市営野芥住宅）ではかまどを持つ古墳時代後期の堅穴住居跡などが確認されている。今回の調査では、古墳時代後期の堅穴建物、中世とみられる南北方向の溝・掘立柱建物を検出した。遺構は確認していないが、弥生時代後期の土器片が少量出土している。							

野芥遺跡7

-野芥遺跡第18次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1446集

2022(令和4)年3月24日

発行 福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社 博多印刷

〒812-0028 福岡市博多区須崎町8-5

